

## 香港のペスト(3) 高田耕安の手紙から

薬学雑誌 1894年度 p 837-840, p 939-942

死病ペストを発症した青山胤通の見舞い(救助?)に医学会、薬学会などの後援で派遣された高田耕安。7/24 中川領事に面会、昼食後、渡し船で病院船ハイジア号にいる青山を訪ねた。その様子を7/24、8/6、8/14 付けの手紙3通で帝大解剖の教授、小金井良精(医科大学学長)に送り、それが薬誌に掲載されている。(なお小金井の夫人喜美子は森鷗外の妹、次女せいは後に星薬科大創設者、星一の妻となる)。

入院中青山の食事は、牛乳5合、酒類(最初から大量に飲ませた)、およびときどき米飯、スープ、茶、独語のできるシスター、中国人のボーイが看護していた。熱は38度、脈拍は100以上、時に130。内服は硫酸石灰丸、肝油。包帯交換は日に4回。皮膚、とくにリンパ腺、リンパ管の膿瘍腫脹甚だしく、切開行うこと27回。この朝も右腋の下を切って膿を出した。左手薬指、右手親指爪辺りの潰瘍は死体解剖のときの傷という。当時は素手で解剖していた(ホルステッドがグッドイヤー社にゴム手袋を作ってもらったのが1891年。目的は消毒薬による手荒れを防ぐためだった)。

ペストの波も過ぎ、前日(7/23)の新患も3人。それでも支那街に対し煉瓦の垣を屋根まで建て、その上にガラス片を建てて侵入者を防いでいたという。戸を閉せる家甚だ多きは、患者を出だせし処なり。海岸に焚き火を見るは、発病家屋の材具を焼くなり。(当時、細菌がネズミのノミを介して皮膚から入ることは知られていなかった)。

8/6 付けの手紙でも青山は依然、膿瘍、肋膜炎、大腸カタル、膀胱衰弱、エリチエマ、ノイラステニーに苦しんでいた。膿瘍は治癒の方向にあったが、左腋窩の膿膿腔は頑固で深さ二三指幅もあったという。北里岡田は既に7/20日香港を発っていたが、8/3には回復した石神も帰途についた。

8/14 付けの手紙には、精神状態快方に向かい、大小用が1人でできるようになるも(ただし椅子式便器)、膿膿腔は鳩卵を容るに足る大きさを有し、胸骨下部に腫起疼痛生ず、とある。青山は8/30東京に戻り、箱根で2週間静養、9/17傷口ふさがり神田駿河台下の自宅に戻った。

小林 力